

テレビの司会やパーソナリティとして、ドラマ、映画、舞台の女優として、さらにはエッセイ執筆や絵本の制作、着物のデザインなど、幅広く活躍している東ちづるさん。ふとしたことからボランティアの世界に入り込み、その活動も今ではライフワークになっているそう。

活動範囲は国内にとどまらず、ヨーロッパにまで広がっている。そんな東さんに、ボランティアを始めるきっかけになった骨髓バンクについて、さらにドイツ平和村でのボランティア活動を通して感じたことをお伺いしました。

東ちづるさん 女優

患者さんや子どもたちと一緒に
癒され、救われ、育まれる
それが私のボランティア



生きていてほしい、夢を叶えてほしい 気が付くと踏み出していたボランティア

きっかけは10年ほど前、ある番組を見たことでした。偶然チャンネルを合わせたワイドショーに、私の出身地広島県因島が映っていて目が止まったんです。その番組では、慢性骨髄性白血病の17歳の少年が取り上げられていて、骨髓移植をすれば助かる可能性があるかと伝えていました。私が少年と同じ17歳の頃には、病気や生死について考えたことはほとんどなかったし、将来は当たり前のようにやってくると信じていました。でも少年とその家族は違う。死の影に脅えながら懸命に頑張っている。私は釘付けになりました。ところが、番組の最後に司会者が発した「頑張ってくださいね」という無神経な言葉に、怒りを感じたんです。少年はすでに頑張っているのに、さらに頑張れというのは、あんまりです。

思春期の多感な時期に、病気のことをテレビで話すのは葛藤があったと思います。それでも少年がテレビに出たのは、きっと何か伝えたいことがあったからだ。これでは少年の思いは伝わらない。私はいてもたってもいられなくなって、ただ勢いだけで電話番号を調べ、少年宅へ電話をかけていました。電話に出てくれた少年のお父さんは、突然の電話に驚いていましたが、それでも私は「できることを何かしたい!」という気持ちをぶつけました。それから、衝動にかられるように骨髓バンクなどについて資料を取り寄せ、勉強を始めたんです。自発的に勉強しようなんて仕事以外では初めてで、自分でも驚きましたね。

数日後、少年の妹さんから手紙をもらいました。そこには、少年の病状と骨髓バンクでドナーが見つからないこと、骨髓バンクの知名度が低いのでポスターを作ってくれないかということが書かれていました。文面からは、お兄さんを絶対に死なせたくないという妹さんの気持ちが痛いほど伝わってきました。もし自分の家族が...と考えると、放つ

ておけるわけがありません。すぐに周囲に声をかけてポスターを作りました。これが私の最初のボランティアです。以来、骨髓バンクへの登録や募金を呼びかけたり、患者さんのお見舞いに行ったり、講演会やシンポジウムを行ったりしています。

当時はまだボランティアが一般的ではなかったのですが、何も知らずに飛び込んでみると、新しい発見がたくさんあって、自分が変わっていくのを感じることができます。始めたばかりの頃は、自分が本当に必要とされているか不安に感じることも多かった。特に、お見舞いに行ったときは、遠慮もあってどういう態度で患者さんと接しているのかわからなかったし、芸能人のおごりと思われはしないかという迷いもありました。でもあるとき、「居るだけでいい」「来てくれるだけで嬉しい」と言われたんです。肩の力がスッと抜けて活動は患者さんと一緒にやっているということに気付いたんです。

相手を分かろうとすることが大切 それがなければ、何も始まらない

テレビの取材で、ドイツ平和村へ行きました。そこは、戦争や紛争で傷ついた世界各地の子どもたちを治療して、リハビリを行い、再び母国の親元へ帰す施設です。運営はNGO(非政府組織)、NPO(非営利団体)で、現在9カ国、150人以上の子どもが暮らし、約120人の子どもが入院して治療を受けています。スタッフは職員とボランティア。すべてが寄付金で賄われています。

子どもたちは、外見は何ともないように見えても、着替えのために服を脱がせると、義足だったり、焼けただれていたり、その小さな体には目を覆いたくなるような傷がありました。その傷からは想像を絶する体験をしたことが容易にうかがえました。スタッフから、彼らが傷を負った理由を聞くと、心の底からやり場のない怒りがこみ上げてきました。子どもたちを傷つけているのは人間。しかし、その傷を癒すのも人間なのです。

あるとき、子どもたちに「君の夢は?」と聞いてみました。ほとんどの子が「学



Chizuru Azuma

校に行きたい」と答えるなか、一人のアフガニスタンの男の子は「1日1個、リンゴを食べること」と言いました。後日、その子にリンゴをプレゼントすると心の底から「うれしい」と。その一瞬、傷つき心を閉ざした彼の表情が笑顔になったように見えたんです。

私たちは、戦争で傷ついた子どもたちの心の痛みがどれほどのものか分からないし、またその子たちが感じる幸せもやはり分かりません。でも、そのような子どもたちの気持ちを分かろうとすることはできます。しかし、気持ちだけでは何も変わらない。何ができるか、何がしたいかが重要なんですね。

リハビリが完了したと見なされた子どもは、母国の親元へ帰されます。それは喜ばしい半面、まだ戦争や紛争の続いている地域に戻すことは非常に危険なことでもあります。子どもたちの帰国に立ち会ったとき、私は生きていてほしいと願いました。どんな状況でも生きてさえいれば…。でも残念ながらすでに亡くなっている子もいるそうです。それが、世界で起こっていることの現実なのです。

ボランティアは 自発的行為だから 自分のスタンスでやればいい

ボランティアを行うことで、私自身、癒され、救われ、育まれていることを実感しています。また、国籍、宗教、性別など、その人の置かれている境遇とは関係なく、人はつねに対等だということに気が付かされました。この10年間で、いろいろと経験し、さまざまな分野の人と会って話すことで、視野が広がりました。ボランティアは、つねに自分の信念に基づいて行動でき、理不



Profile

東ちづる（あずま・ちづる）
広島県出身。ドラマから司会、CM、ラジオ、エッセイ執筆、オリジナル着物のデザインなど幅広く活躍中。一方、プライベートでは、「骨髄バンク」や「あしなが育英会」、「ドイツ平和村」などのボランティア活動を続け、休日を利用して講演会やシンポジウム、病院のお見舞い、募金活動等で全国を訪れている。著書に『わたしたちを忘れないで ドイツ平和村より』（日本図書館協会選定図書・ブックマン社）、『ピピってたまるか』（双葉文庫）、絵本『マリアナとバルーシャ』などがある。自身の絵本を通じて平和について考えるチャリティイベント「戦争とドイツ平和村の子どもたち～絵本原画展」を5/7～6/10神戸学院大学にて開催。開催中、本人による絵本読み聞かせ&サイン会あり。



尽なことには怒ることもできます。嫌になったらやめることだってできるし、我慢する必要はありません。いつでも自分らしくいられます。

もともと私は、ボランティアをやろうと思って始めたわけではなく、ただ生きていてほしいという気持ちで、無我夢中でやっていました。いまもちろん、やりたいからやっているだけなのですが、その関わり方はライフワークとして、ボランティアを楽しむという気持ちで活動しています。「楽しむ」というと、不謹慎だと言う人もいますが、ボランティアをすることによって自分が犠牲になっていたのでは続きません。楽しむことはとても大切です。たとえば私の場合は、活動そのものはもちろん、ボランティア仲間に来て話すことも、その地方の料理を食べるのも、あらゆることを楽しんでいきます。

これからボランティアを始めようと思っている人もいると思いますが、自分が成長するのではないかと、感動があるのではないかと過度に期待して始めると、あとで理想とのギャップを感じるかもしれません。ボランティアは自発的行為なので、やらなければいけないと焦る必要はないし、またボランティアをやっている人が、そうでない人を非難することがあってもいけません。募金するにしても、活動するにしても、心が動いたときに、自分の責任においてできることから始めればいいのです。

(財)骨髄移植推進財団 日本骨髄バンク

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-13-12 新宿ISビル8F
TEL 0120-445-445 FAX 03-3355-5090
<http://www.jmdp.or.jp>

ドイツ平和村

ドイツ平和村では、皆さんからの寄付を募っています。
日本からの募金は、以下の口座で受け付けています。
東京三菱銀行 東京営業部 普通口座 口座番号2680343
名義人 ドイツ平和村 又は Aktion Friedensdorf e.V

京都市 人権問題 に関する 意識調査 について

調査対象

20歳以上の外国籍を含む市民7,500人

調査期間

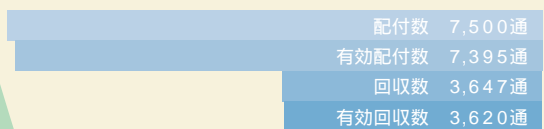
平成12年11月22日～12月10日

調査方法

郵送によるアンケート調査(無記名回答)

外国籍の方には、日本語、ハングル及び英語で作成した調査票をお送りしました。

調査票の回収状況



有効回収率
49.0%

調査及び分析

財団法人世界人権問題研究センター

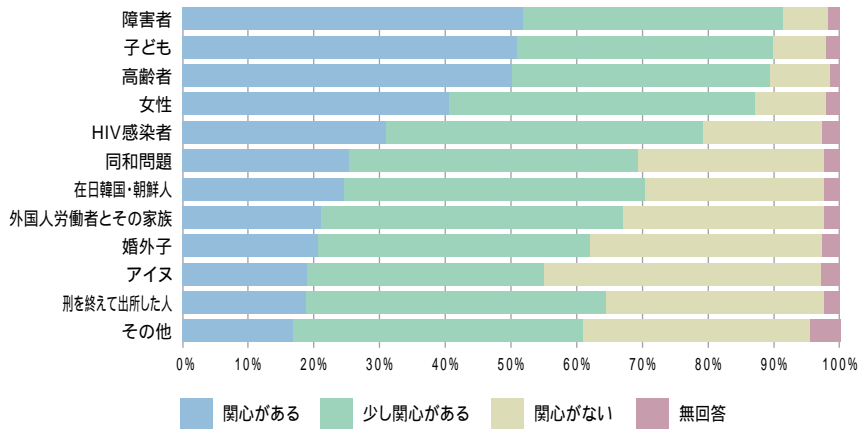
お問い合わせ

人権文化推進課 ☎075-222-3381

京都市では、平成11年3月に「人権教育のための国連10年京都市行動計画」を策定し、日々の暮らしの中に人権を大切に、尊重し合う習慣が根付いた人権文化の息づくまちを築くためのさまざまな取組を進めています。この取組を効果的に進めるため、人権問題全般にわたる市民意識調査を実施しました。

今回、調査結果の一部を抜粋して紹介していますが、人権問題についての関心が高く、問題解決のための取組の必要性を感じる人が多い一方で、偏見をもったり、特定の人たちを避けるような態度もみられました。この機会に、改めて人権問題について考えてみませんか？

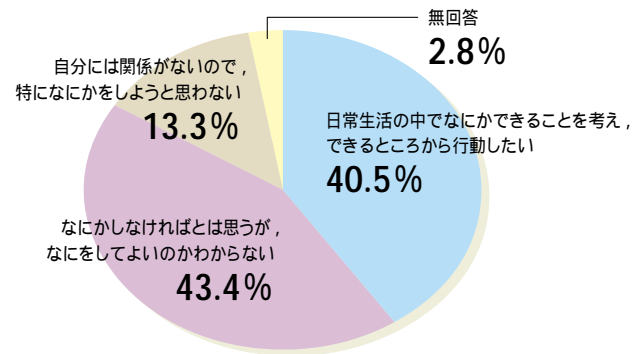
Q1 次にあげた人権問題について あなたはどの程度関心がありますか。



人権問題について高い関心

「関心がある」「少し関心がある」の回答を合わせるとどの項目も50%以上となっていて、多くの人々が人権問題に関心をもっていることがわかりました。中でも自分や自分の身近にいる人に関連すると思われる課題への関心が高くなっています。

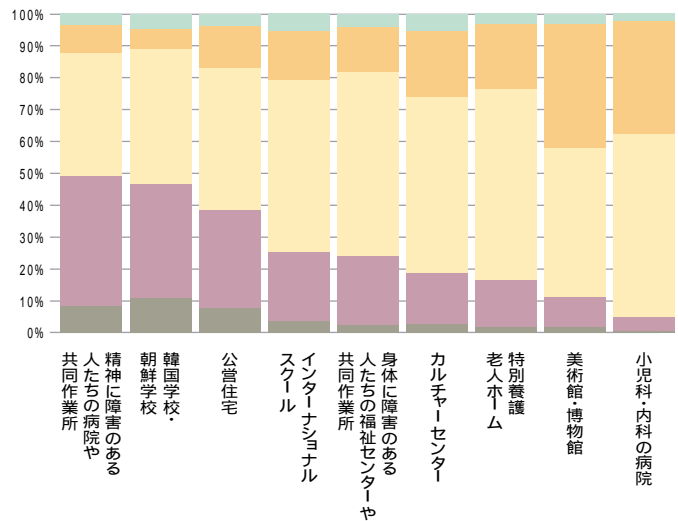
Q2 あなたは人権問題の解決のためにどのようなことをしようとお考えですか。



人権問題解決のために「なにかしなければ」と考える人は80%以上

「日常生活の中でなにかできることを考え、できるところから行動したい」と「なにかしなければとは思いますがなにをしてよいのかわからない」を合わせると80%以上の人々が人権問題の解決について行動を起こす必要性を感じていることがわかりました。ただ、そのうち半数はなにをすればよいのかとまどっていることもわかりました。

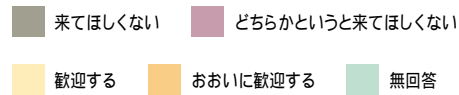
Q3 あなたのお住まいの近くに次のような施設が建設される計画を知ったとき、あなたはどのような態度をとると思いますか。



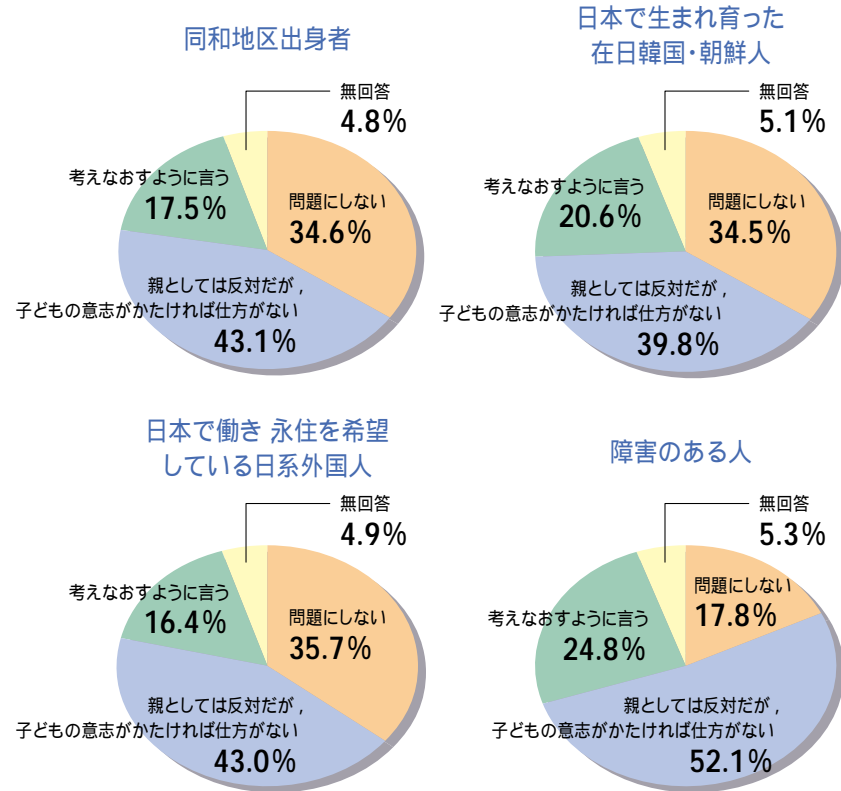
精神に障害のある人たちの病院や共同作業所の建設について拒否的な回答が約50%

「来てほしくない」と「どちらかという来てほしくない」という気持ちを表す回答が多かったのは、「精神に障害のある人たちの病院や共同作業所」(49%)、「韓国学校・朝鮮学校」(47%)などです。一番少なかった「小児科・内科の病院」(5%)と比べると40ポイント以上の差があります。

この結果から精神に障害のある人や在日韓国・朝鮮の人が受け入れられにくい状況にあることがわかります。



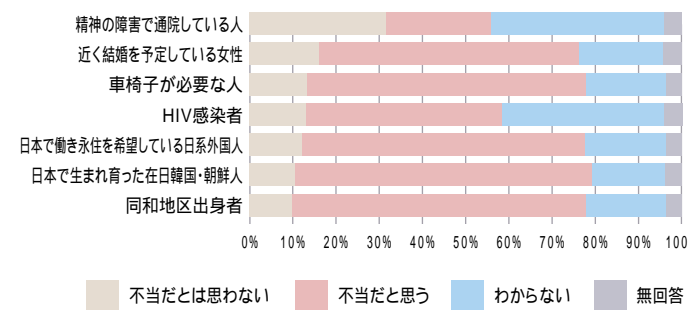
Q4 (...略...)お子さんの結婚相手が次のような人であった場合、あなたはどのような態度をとると思いますか。



子どもの結婚相手が「障害のある人」であることを「問題にしない」人は18%

子どもの結婚相手が同和地区出身者、在日韓国・朝鮮人、日系外国人、障害のある人であった場合、明確に「考えなおすように言う」と答えた人は16~24%でした。また、「親としては反対だが子どもの意志がかたければ仕方ない」という回答は40~52%となっています。一方、「問題にしない」と答えた人は、「障害のある人」では18%、それ以外では35%程度となっています。結婚を避けようとする意識が少なくないことがわかります。

Q5 仕事をする能力が十分あるにもかかわらず、次のような人が採用を拒否された場合、あなたはどのように思われますか。



「精神の障害で通院をしている人」が採用拒否をされても不当と思わないとする人は32%

採用拒否を「不当だとは思わない」という回答が一番多かったのは、「精神の障害で通院している人」(32%)で、続いて「近く結婚を予定している女性」(16%)となっています。そのほかの項目についても約10%以上の人々が「不当だとは思わない」と回答しています。つまり、10人に1人以上が仕事をする能力があるにもかかわらず採用拒否をされる人がいても仕方ないと考えていることとなります。

京都市では、市民しんぶんなどの広報誌や講演会の開催を通じてさまざまな人権啓発活動を行っています。また、民間団体などによる啓発活動も行われています。啓発事業などに触れる機会が多かった人は、人権に関する知識が豊富で、人権を尊重する意見をもつ人が多いことがわかりました。

京都市では人権問題にかかわるさまざまな事業を実施しています。これらの事業の詳細については本誌、市民しんぶん及び本市ホームページなどで随時お知らせしますので、積極的なご参加をお待ちしています。

人、輝いてます！

鴨川河川敷で生活するホームレスの自立支援活動に取り組んでいるのが、大谷中学・高等学校の生徒たちを中心とする「ハレジャ基金」のメンバー。今回は、彼らのボランティア活動を通して、ホームレスの人権とは何かを考えます。

「ボランティアでいろんなことが経験できて楽しい」「人のために役立っているという充実感がある」。生徒たちから弾むような笑みがこぼれます。彼らは、大谷中学・高等学校の生徒で取り組むボランティアグループ「ハレジャ基金」のメンバー。ハレジャとはタイの山岳少数民族の言葉で、「しあわせ、うれしい」という意味です。

もともと、タイ北部に支援物資を贈る活動をしていたそうですが、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけにホームレス支援などにも積極的に取り組むようになりました。

現在は、同校の「チャイルド・コミュニティ・クラブ（CCC）」と協力して月に1回程度、鴨川河川敷で暮らすホームレスの人たちに、炊き込みご飯を作ったり、歯ブラシやカイロ、石けんなどの日用品を配っています。そのほか、福祉施設などへ車いすを寄贈したり、催しを開いたりする活動を続けています。

「学校の家庭科教室を利用して150人分くらいのご飯を炊いたりしてるんですよ」と、まるで友だちとクラブ活動を楽しんでいるよう。また冬には、生徒たち



ホームレスの人に声をかけ、食料や日用品を配って回ります

一人ひとりが手作りのチラシを持って、地域のみなさんに古着や毛布の提供をお願いして回ることもあります。集めた衣料品等はリヤカー8台分になることもありますが。「最初はリヤカーを引くのが恥ずかしかったけど、ホームレスの人に手渡すときに『ありがとう』と言われて、恥ずかしさが吹き飛んだ」とうれしそうに目を細めます。

「僕たちができることを、できる範囲でやろうとい

身の丈ボランティアで ホームレス支援



車いすの寄贈だけでなく、福祉施設の人に楽しんでもらえるよう催しを行います

うのが活動方針。今日何をするのか、どんなことができるのか、すべて僕たちが決めるんです」と話すのは塩澤順哉さん。お米や日用品を買い揃えるのには資金が必要ですが、これらのほとんどは募金活動やアルミ缶回収など生徒たち主体の活動でまかっています。特に募金活動は、授業終了後、手の空いたメンバーが必要に応じて行っており、3日間で15万円を集めたこともあるとか。最近では、他校の生徒の参加や問い合わせも増え、ホームレス支援活動の輪は確実に広がっているようです。

ハレジャ基金では、単にホームレスの自立を支援するだけでなく、ホームレスの人たちが何を考え、どういう状況に置かれているの

か理解を深めようと、数年前から聞き取り調査を実施。「住んでいて怖いことは？」「日々の生計はどうやって立てているの？」など、ホームレスの生活実態をまとめた冊子を今年1月に作りました。また、ホームレスの人を学校に招いて、実際に生の声を聞く機会も設けています。「最初はちょっと怖いかな

と思ったけれど、話していたら普通のおじさんだった」「だれも望んでホームレスになったわけじゃない。僕の両親と同じぐらいの年代の人が多くいて、決して他人ごとではないと思った」と、生徒たちにとってもホームレスの問題を真剣に考えるきっかけになったようです。

最近、ホームレスに対する偏見や差別などから、中学生や高校生による痛ましい事件が起こっています。しかしその一方で、ホームレス支援に積極的に取り組んでいるのも、また彼らの世代なのです。「確かに食事や日用品を配ってくれるのはうれしい。でも、君たちのような若い人が気さくに話しかけてくれるのが何よりうれしい...」。あるホームレスの人の言葉です。無理をせず、身の丈にあったボランティアを。ハレジャ基金の一つひとつの活動が、いままさに実を結ぼうとしているようです。

URL <http://www11.freeweb.ne.jp/sports/pipo-t/halehja.html>
連絡先 ☎ 075-541-1312 (東村)

ハンセン病とは、らい菌という感染力の弱い病原菌によって起こる慢性の細菌感染症。らい菌を発見したハンセン医師の名前をとってハンセン病と呼ばれるようになり、かつては不治の病として恐れられていましたが、感染力も極めて弱く、現在では治療法も確立して在宅治療で完治するようになりました。しかし、治療法がなかった頃はハンセン病に対して正しく理解されず、患者やその家族は、差別や偏見によって多大な精神的苦痛を強いられました。「ハンセン病」とはどのような病気なのでしょうか。病気を正しく理解し、社会に残る差別や偏見の解消に向けて共に身近な問題として考えてみましょう。

今号のワード

ハンセン病

ハンセン病と聞いて、みなさんはどんなイメージを思い浮かべますか。名前を聞いたことがあっても、病気について正しく理解している人は少ないのではないのでしょうか。そのためハンセン病は「治らない、遺伝する」などといった間違ったイメージをもたれていることが多いのです。

ハンセン病は、らい菌という感染力の弱い菌による慢性の細菌感染症で、この菌の発見者であるG・H・アルマウエル・ハンセン医師の名前をとって、ハンセン病と呼ばれるようになりました。ハンセン病は感染しても発病することはほとんどありません。万一、発病しても今ではすぐれた治療薬が開発され、早期発見、早期治療によって神経障害などの後遺症を残さず完治する軽度の感染症となりました。また、この菌は治療によって数日のうちに感染力を失うので、通院治療によって治すことができます。したがって、日常生活において患者との接触で感染することはありません。もちろん、遺伝することはありません。

しかし、治療法がなかった頃は、病気の進行によって手足や顔が変形することもあったため、悪性の伝染病や遺伝病などと考えられ、恐れられていました。1996年に「らい予防法」が廃止されるまでは、患者が全国に設置されたハンセン病療養所に強制隔

離されたという歴史があります。約90年にも及ぶ隔離生活で、入所者やその家族の方々が受けた精神的肉体的な苦痛ははかりしれません。

WHOが発表した世界ハンセン病患者の数は約126万人（1996年WHO推計）。日本では、新たな発症例が年間数人となりましたが、世界では毎年、約50万人もの人がハンセン病と診断されています。また、国内では現在、約4400人の方が療養所生活をおくっておられますが、ほとんどの方は病気が軽快されており、いつでも退所できる状態なのです。しかし社会復帰には、病気が治っても高齢のうえ、長期間にわたって社会との交流が絶たれていたことや、世間の誤解や偏見のために、課題が山積しているのが現状です。ハンセン病は恐ろしい病気ではありません。“治る病気”なのです。私たちは、歴史的事実を受けとめ、一人ひとりが正しい知識と理解を持ち、認識を持って次の世代に伝えていくことが大切です。それがハンセン病に対する誤解や偏見をなくすことにつながるのです。

ハンセン病について正しく理解しましょう

ハンセン病は...

早期発見と適切な治療をすれば完治します。

感染力は非常に弱いものです。

健康な人は、患者との接触で感染することはありません。

在宅で治療ができます。

感染しても発病しないケースがほとんどです。

ハンセン病を正しく理解する週間

平成14年6月23日(日)～6月29日(土)

お問い合わせ先
京都府保健福祉部健康対策課感染症係
☎ 075-414-4734



精神に障害のある市民の社会参加を促進

精神疾患のある人や、さまざまなこころの健康の悩みを抱える人たちの相談援助、社会参加を推進しているのが「京都市こころの健康増進センター」。21世紀のこころの時代を迎え、その取組が注目されています。

社会生活や人間関係がますます複雑化する中で、精神やこころのバランスを崩してしまう人が増えています。「京都市こころの健康増進センター」は、こころの健康についての情報提供をはじめ、精神疾患による障害のある人の社会参加促進、相談事業、精神保健福祉に関する講演・研修会などを行うために、平成9年4月に開設されました。

1階の相談援助部門では、専用電話による相談や来所相談を受け付けています。最近のストレス社会を反映して、



家庭や職場での悩みだけでなく、アルコール依存やひきこもりについての相談など、年間3000件近くもの相談が寄せられます。相談内容や個人情報

の秘密は固く守られるので、だれもが安心して利用することができます。

精神疾患による障害のある人が自立した生活を営んでいくためには、人との関わりや社会とのつながりを広めていくことが不可欠です。2階にあるデイ・ケア部門は、精神科に通院している人が、他のメンバーとともに多彩なプログラムに参加したり、自由な時間を過ごしながら社会参加への準備を行う場所です。通所者は20歳代の若い人が多く、それぞれ自分の目標をもって、自己実現のステップとして施設を利用しています。プログラムの内容も、バレーボールや卓球などのスポーツ、ろくろを使った本格的な創作陶芸、園芸や料理教室など実にさまざま。病気や人とのつき合いについての学習会をしたり、民間企業の協力を得ながら、実際に就労体験活動も行っています。また、精神科医や作業療法士、ソーシャルワーカーなど専門スタッフによる個人面接も定期的に実施しており、通所者からは「自分に自信を持つことができた」「気の合う友だちができた」といったうれしい声が寄せられています。

相談員による電話相談、来所相談の予約受付

おはなし
TEL.075-314-0874

受付時間 / 9:00～12:00, 13:00～16:00 (土・日・祝日を除く)
精神科医による相談 (予約制) も行っています。まず、お電話ください。

「会社で働く自信はないけれど、少しずつ仕事をしながら社会復帰を目指したい」という人たちの声に応えて、当センターの3階に開設され



お弁当の調理から盛り付け、配達まですべてメンバーが行います

ているのが、通所授産施設「朱雀工房」。福祉施設での清掃・洗濯、箱折りや袋詰め作業など、所内外でさまざまな活動に取り組んでいます。特に、お弁当の調理から盛り付け、配達まですべてメンバーが行う「独居老人への配食サービス」は大好評。毎日届けられるお弁当を楽しみにされているお年寄りも多いといえます。また地域で生活するためのお手伝いをし、地域住民との交流を深めるくつろぎの場「なごやかサロン」も併設されています。最近では、就労者を積極的に受け入れる企業や、ボランティアなどで施設を訪れる人たちも増えてきました。精神疾患のある人々への理解は徐々に高まりつつあるようです。

21世紀は「こころの時代」といわれています。しかし、精神疾患に対する誤解や偏見があるのも事実。本当の意味でのノーマライゼーション社会を実現するためにも、「京都市こころの健康増進センター」の存在意義はますます大きなものとなっています。

京都市こころの健康増進センター

〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1番地の15
開所時間 / 8:30～17:00 休所日 / 土・日・祝日

なごやかサロン

開所時間 / 9:00～20:00 (土・日は16:00)

休所日 / 火・第3日曜

交通機関 / 市バス「西大路松原」下車徒歩約3分、
「市立病院前」下車徒歩約4分

相談援助部門 075-314-0355
デイ・ケア部門 075-314-0510
通所授産施設(朱雀工房) 075-314-0835
なごやかサロン 075-315-2240

編集後記 「僕たちができることをできる範囲でしたい。」ホームレス支援をしている中・高生の言葉です。通勤電車で目にするマナーの悪い若者の姿がっかりしていたのですが、今回の取材を通じて、彼らに多くのことを学びました。「世の中のことをもっと知りたいです。」と希望に満ちた元気な声が、「大人のみなさんも、しっかりしてください。」という彼らからのエールとして聞こえました。(K)

本誌に対するご意見、ご感想を右記までお寄せください。この情報誌は、年3回(5月,8月,12月)発行します。

ひと・まち・ロマン  元気都市・京都

発行日 平成14年5月1日
発行 京都市文化市民局市民生活部人権文化推進課
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る
上本能寺前町488番地
☎075(222)3381
<http://www.city.kyoto.jp/bunshi/jinken/index.html>
京都市印刷物第140080号

この情報誌は、区役所・支所の地域振興課、市役所の市政案内所ほかで配布しています。郵送をご希望の方は、返信用切手(140円分)を同封のうえ、京都市人権文化推進課までお申し込みください。